
さくら

織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらら

【著者名】

織姫

NZ8612F

【あらすじ】

美しい花にはトゲがある。美しいせくりには闇がある。美しいさくらに「」注意を。

～美しい花にはトゲがある～

甘く・鼻に残る匂いが私を包んだ。振り返るとそこには大きな桜の

「桜」

憎き桜。

姉さんを私から奪つた桜。

許さない！ 桜なんて嫌いだ……

今日は高校の入学式。
の少女、野田春菜。

「入学式」行かなきや

桜から田を背けるようにそそくさと体育館へ行く。

校長の話がかすかな聞こえる中、春菜はただ一人の家族だった姉のことと思い出していた。

姉の春香とその妹の春菜は幼いときに両親を失つた。しばらくは親戚の家を転々していたが、2人でマンションを借りて住むようになった。

狭い部屋だつたが春菜は「コガ一番好き。

ある日春香が言つた。

「桜の木のところでね・素敵な人に会ったのー・とてもかつこよくて
ー・どうしよ、こんな気持ち初めてーーー！」

春菜は幸せそうに恋をする春香を見守っていた…

でも、そんな春香には少しづつ異変が起きていた。

春菜が話しかけてもぼーっとしてなかなか気がつかない。

だんだん症状は悪化し、ついに春菜の声に反応しなくなつた。

田は遠くをみている。

でも…。

目に表情がない。人形のようだ…

春菜があせり始めた頃、

春香が帰つて来なくなつた。

次の日、春菜は姉から聞いていた桜の木へ向かつた。

何故だらう?

絶対春香がそこにいると思つた。

小さな丘の上には、立派な桜の木が一本。
花びらが散つている。

春菜を花びらが包んだ。甘く、鼻に残る匂いがする。

木の下には見慣れた顔が安らかに眠つていた。

桜の花びらはそれを祝福するかのよう…姉まわりに積もつっていた。

「姉さん…姉さん…！」

わかつっていた。

もうかえつて来ない」とくらい。

もう一人ぼっちになつたことくらい。

「…つ…いやあああああああ…！」

残されたのは高校の制服を着た姉の死体と泣きじやくる小学生の少女だけだった。

- - - - -

小学生だった少女は高校生になった。

姉と同じ高校。

「姉ちゃん

周りが少しづわざわしている。

ああ、入学式おわったんだ…結局なにも聞いていない。教室に戻ると、入学式らしい光景。みんなおとなしい。

春菜にだれかが声をかける。

「あのう…席隣なんですよ…よろしくね。私はみなみ南。」

そこには黒髪のストレートヘアの女の子。

「あ。よろしく。」

私に話しかけてくるなんて。珍しい子。

そう。春菜は見た目が怖い。いつだってムスッとしていて髪は赤茶色。肩につくくらいの髪にパーマをかけて、ピアノだってじゅらんじゅらんだ。話しかけてくる人なんてそうそういう。そうゆう恰好に憧れているわけではないが、過去を忘れたくて、昔の自分を捨てた。見た目だけでも。自分を変えたくて。

「桜好きなの？」

南が聞く。

「嫌い…す」「べ。」

中身は悪いわけではない。むしろ昔からの優しい春菜だ。

「さつき見てたから好きなのかなあって思つた。」

「……」

すると先生が入ってきた。会話はそこで中断。

でもこの日から、春菜と南はいつも一緒に行動するようになった。

南は「」となく春香に似ていた。
姉と一緒にいるような気がして、春菜は南と一緒にいる時間がすごく楽しくて、大切にしていた。

一年後。

いつものように南と投稿する春菜。

「じゃあ・それが本当にウケて……」

「あははは……本当……」

下駄箱にさしかかったとき南が突然言つた。

「「めん、ちょっと先教室いって……」」 そろこつて昇降口からでていった。

気に留めず教室で待つといふと、南が帰ってきた。

「どうした?」春菜が聞く。

「聞いてよお！…桜の下で素敵なお人に会ったの！一目惚れしちゃつた！！」

- - - - - - - - - -え.....??

南の話によると桜の木の下に人影が会ったので気になり書いてみたら
そいつに会つたのだという。

桜

素敵なお人

姉さん

まさか。

ミナミモウシナツテシマウカモシレナイ。

「だ…ダメ…！…そいつはダメ…！」春菜は叫んだ。

教室中の視線を感じる。

そんなことせびりでもよかつた。

ダメ…！

「なに・・・私に好きな人できりゃいけないの?」南が悲しそうに呟く。

「ちがつ...」

「そんな子だったの?」

南は話してくれなくなつた。

そして。

南は口々に遠くを見る人形のよつよつとあるよつとなつた。

姉と同じよう。

そして

南も…失つた

桜の木の下に眠る南は姉と同じ顔だった。

違うのは桜の木が姉と違う木だつてこと。学校では大騒ぎになつた。

校庭の桜の木の下で、少女が死んでいた、と。

春菜は悔やんだ。なんでもつとちゃんと止めなかつたんだ、と。

ごめん… 南

私は桜を許さない。

心に誓つた。

それから数年経つた。

春菜は社会人だ。

某大手会社の社長の秘書となつた春菜は見た目は黒髪のまとめ髪。きつちりと着こなしたスーツ。数年前の面影はなく、できる女性の代表のような女になつていた。

ある春の帰り道。今日も遅くなつてしまつた…

「明日も社長は忙しいなあ。しつかりサポートしなくちゃ……」
なんて独り言をいいながら、ある公園の前を通つた。

春菜をあの嫌な匂いが包む。甘い、鼻に残る匂い。

春菜は顔をしかめる…

オイデ

何か聞こえた気がした。

オイデ

やつぱり……！……！

公園を見ると桜の木の下に綺麗な顔の男性が立っていた。

春菜はあまり思考回路が回らなくなっていた。
桜の麗しい香りに酔っているかのように。

体がかつてに動く……

頭の中は真っ白だ……

男性の前まで歩いて来た春菜はもう警戒心など忘れていた。

きれいな瞳。

吸い込まれるよつな。

ねえ… セ… ん…
み… なみ…

金髪の少し癖のある髪。すり減らした身長。

なんて素敵な人…

ね… え… セ…
み… な…

春菜は恋に落ちた。

春香や、南と同じようだ。

数日後。公園の前は大騒ぎだった。

黒髪の女性が桜の木の下で眠るように死んでいた。

彼女の死を喜ぶように桜の木は一層綺麗に咲き誇り、花びらを散らしていた。

桜は、人の魂を吸い取つて綺麗にサク。

美しい花にご注意を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612f/>

さくら

2010年10月30日09時51分発行